

部活動における先輩後輩関係の研究

— 構造, 実態に着目して —

小野 雄大* 庄 司 一 子**

本研究の目的は、中学校と高校の部活動における先輩後輩関係の構造を明らかにし、また学年や性別、部活動のタイプやレベルによって先輩後輩関係にどのような違いが生じているのか、さらに先輩後輩関係が、部活動の活動内容や特徴によってどの程度予測されるのか明らかにすることであった。そのため、全国の中学生と高校生 711 名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、中学生・高校生ともに 1 年生が最も先輩後輩関係を感じやすい立場にあり、中学生では男子よりも女子の方が先輩後輩関係を厳しく捉える傾向にあることが明らかになった。また、部活動のレベルやタイプ別の検討では、競技・コンクール等で高いレベルで活躍する部活動や、文化部よりも運動部において、先輩後輩関係が明確になることが明らかになった。さらに、部活動の方針や性格等が、先輩後輩関係の各側面を高く予測することが明らかになった。

キーワード：部活動, 先輩後輩関係, 中学生, 高校生

問題と目的

ベネッセ教育研究開発センター (2009) が行った中学生と高校生の部活動参加状況に関する調査によると、2009 年時点での部活動の参加状況は、中学生が 85.9%、高校生が 83.4% であり、学校において多くの子どもたちが部活動に取り組んでいることがわかる。部活動は、運動や文化活動への自発的な要求を持った生徒が参加し、通常の学校生活における学年やクラスの枠を越えて組織される異年齢集団である。部活動での経験が生徒の現在と将来の生活に役立つという考えは、生徒、教員、保護者の間に強くあり (中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議, 1997)、子どもの身体的発達や運動・文化技能の向上はもとより、人間性の育成が重要な目標にあげられる。部活動の本質とは、そこでの豊かな経験を通して、人間的にも成長し、良好な人間関係を育み、社会性を身につけるところにあると言える。

一方で、わが国の部活動では、人間教育の名の下に「体罰」や「しごき」が横行し、また部活動特有の「封建的な人間関係」の存在など、数々の問題が山積している (Cave, 2004; 神谷, 2007; 森川・遠藤, 1989; 城丸・水内, 1991; 友添, 2013)。これらの問題は「勝利至上主義」や

「非科学的な精神論」によって支えられ、しばしば社会をも大きく揺るがす問題として注目されてきた (例えば朝日新聞, 2013)。部活動の過熱化によって教育活動としての価値を逸脱したこれらの問題は、これまで部活動を語る上で常に指摘がなされてきたものの、その解決に向けた議論や、教育的な意義を伴った議論が進んでおらず (黒須, 2007)、今もなお問題の解決には至っていない。

さらに久保 (1980) は、運動部活動を例にあげ、運動部活動の封建性が問題とされる場合、まず例示されるのが上級生と下級生の支配従属関係であり、強制による権力的支配関係として成立している現状を認めざるをえないとしている。同様に中村 (2009) も、本来は生徒の自主的で民主的な運営が求められる部活動において、部員間に生じるヒエラルキー的な支配・従属関係は、民主的な運営を妨げる重大な要因であると指摘している。

実際にこれまでは、部活動において先輩後輩関係による悩みを関連とする生徒の自死やいじめが数多く報道されてきた (例えば朝日新聞, 1995)。したがって、部活動での活動以前に、部活動内における人間関係、特に上記のような先輩後輩関係を契機に、部活動での活動に支障が出たり、活動の継続そのものを断念せざるをえない生徒は少なくないであろう。実際、青木 (1989) は、高校の運動部員の部活動継続と退部に影響する要因について検討を行い、退部者の退部理由として、男子・女子ともに「人間関係の軋轢」が大きな要因とな

* 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科
〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15
y-ono.sps@suou.waseda.jp

** 筑波大学人間系

ることを明らかにした。また、稲地・千駄(1992)は、部活動における先輩後輩関係は、「不平等感」や「過酷さ」、「拘束感」を強く伴ったものであるとしている。このように先行研究においても、部活動には先輩後輩関係によって引き起こされる問題が色濃く存在していることが報告されている。

一方で、先輩後輩関係はネガティブな影響だけではなく、ポジティブな影響もあると言われている。例えば、関西大学人権問題研究室女性問題研究班(1999)が実施した大学の部活動とサークルの実態に関する調査において、学生は先輩後輩関係を通して組織の規律が保たれ、礼儀などが身につくと考えていることが報告されている。また、宮下(1995)は先輩後輩関係の意義として、社会の実態により近い環境の中で、先輩と後輩が意見し、尊重し、協力していくプロセスこそが、青年期の自己の信念や価値観の形成に寄与するものとしている。このように、先輩後輩関係に関する内実は、ポジティブ・ネガティブの両面において人々に実感されるものであるが、それ自体は非常に曖昧さを含んだものと言える。

文部科学省(2008)は、学習指導要領において部活動を「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するもの」(文部科学省, 2008, p.19)と位置づけており、実際に部活動を取り上げた先行研究では、部活動と学校適応感や学業成績との関連など、部活動そのものが生徒に及ぼす影響や効果の検討が非常に多く行われている。

岡田(2009)は、部活動に積極的に参加している生徒は学校生活の様々な領域で良好な状態にあるだけではなく、心理的適応も高いことを示し、部活動それ自体は、生徒が充実した学校生活を送る上での重要な心の支えとして機能していることを明らかにした。また、竹村・前原・小林(2007)は、対象がスポーツ系部活動と限定的ではあるが、部活動を行っている生徒は、目標志向性や学校適応が高いことを明らかにした。この他にも、部活動に取り組むことが学業成績や学校満足感を高めること(角谷, 2005; 山口・岡本・中山, 2004)などが明らかにされている。これらの先行研究からは、部活動に継続的に参加していることが、生徒に肯定的な影響を及ぼすことが示唆されている。

部活動における人間関係を検討した研究では、例えば吉村(2005, 2010 他)の主将のリーダーシップが部活動への適応感や部活動内の仲間づき合いに及ぼす影響を検討した研究や、東野(2003)の中学生の部活動にお

ける対人関係を友人・教師との関係から検討した研究などがあげられる。しかし、これらの研究は具体的な人間関係の構造や実態に踏み込んでおらず、人間関係の効果や作用に関する検討に留まっている。

他方、本研究に特に関連性の強い研究として、新井・松井(2004, 2006)による、大学のサークル集団に所属する大学生を対象にした、対後輩行動と対先輩行動の構造に関する研究があげられる。新井・松井は、先輩・後輩間で取られる具体的な行動を生起頻度に基づいて分析し、対後輩、対先輩行動を構造的に明らかにした。しかし、対象が大学生のサークル集団であることや、対後輩、対先輩行動という、限定的な行動側面の構造に焦点をあてた研究である。

以上のように先行研究では、部活動の教育的な効果や作用に関する検討は幅広く行われているものの、部活動内の具体的な人間関係の実態を取り上げて検討した研究の蓄積は浅い。部活動内の人間関係は、部活動への適応を考える上で最も重要な問題であり(吉村, 1997)、先輩後輩関係に関してはその問題点や重要性が度々指摘されながらも、限定的な記述に留まっている。中学校および高校時代の部活動経験が生徒に及ぼす影響や、卒業後もその影響が持続する可能性を踏まえれば、中学生と高校生を対象とした、先輩後輩関係に関する実証的な研究を行う必要性は十分にある。

そこで、本研究では、以下を研究の目的とする。まず、「部活動における先輩後輩関係尺度」を作成し、部活動における先輩後輩関係¹の構造を明らかにする。次に、先輩後輩関係が、学年や性別、部活動のタイプ(運動部・文化部)やレベルによってどのように異なるのか、その違いを明らかにする。さらに、「部活動の活動内容・特徴尺度」を作成し、この尺度を用いて、先輩後輩関係が部活動の活動内容や特徴によってどの程度予測されるのかを明らかにする。

予備調査

目的

予備調査では、「部活動における先輩後輩関係尺度」と「部活動の活動内容・特徴尺度」を作成することを目的とする。そのために、部活動における先輩後輩関係の経験・考えと、所属している部活動の活動内容や特徴に関する質問を行い、自由記述によって回答を得

¹ 本研究では先輩後輩関係を「部活動において先輩・後輩という、学年の順番によって生まれる人間関係のことを指す。かつ、そこにおいて立場の上下が決まる関係である」と定義する。

る。これにより質問紙の調査項目を収集する。

方法

調査対象 首都圏2校の公立高校において、学級単位の調査を実施した。内訳は高校1年生～2年生計143名(男子83名,女子60名)。

調査内容 ①所属している部活動自体に関すること(活動内容や雰囲気,練習の頻度,顧問の関わり方など),次に先輩後輩関係の定義を示した上で,②現在および中学校時の部活動では,先輩後輩関係においてどのようなことが行われているか(いたか),自由記述によって回答を求めた。

調査時期および実施方法 調査は2011年3月および6月に実施した。調査の手続きは,調査対象者の在籍する学級単位で授業時間などを用いて集団で実施された。質問紙調査は無記名式で行い,調査対象者の回答の匿名性が確保されることを質問紙に明記した。また,調査に対する同意については,質問への回答は自由意志であること,答えられない項目や,答えたくない項目は無理に答えなくてよいことを質問紙に明記することによって得られたものと判断された。これらの方法は全ての学年において共通であった。

結果

自由記述の回答の全てを文節単位で抽出し,KJ法を援用して分類した。この自由記述の結果に,先行研究(新井・松井,2004・2006)から選定した項目を加え,部活動における先輩後輩関係の構成概念として,「先輩のリーダーシップ」(「先輩は責任感を持って部の発展に努めている」など),「行動・服装の制限」(「後輩は制服,ジャージ,カバンなどの身なりが制限されている」など),「後輩の仕事」(「後輩は練習の準備と片づけを行っている」など),「先輩を尊重・優先」(「先輩の言うことは何事も絶対である」など),「コミュニケーション」(「後輩は先輩に悩みを相談することができる」など)の5つが見出された。部活動の活動内容や特徴に関する概念は,「環境」(「部の伝統と言えるものがある」など),「顧問」(「顧問を信頼している」など),「目標志向性・雰囲気」(「活動中の雰囲気はいつも良い」など),「人間関係」(「部員間の仲が良い」など)の4つが見出された。

次に,上記の過程を経て得られた項目について,心理学・教育学を専攻する8名の大学院生の協力を得て,内容的妥当性の検討を行った。その結果,最終的に「部活動における先輩後輩関係尺度」の項目として22項目,「部活動の活動内容・特徴尺度」の項目として23項目が選定された。中学生と高校生にも理解が容易になるよう,中学校と高校の現職教員により,項目表現の修正を実施した。

本調査

目的

本調査では,まず,予備調査で作成した尺度の因子構造を検討する。次に,学年や性別,部活動のタイプやレベルによる先輩後輩関係の違い,さらに先輩後輩関係が部活動の活動内容や特徴によってどの程度予測されるのか検討することを目的とする。

方法

調査対象 北海道,茨城県,東京都の公立および私立学校の中中学生と高校生を対象として,学級単位の調査を実施した。調査対象校については,校種(私立・公立)と地域に加え,部活動の活動レベルによる検討を行うため,部活動の活動レベル²(以下,レベル)を考慮して選択した。内訳は,中学校は5校,1年生～3年生の計11学級,計344名(男子166名,女子178名)であった。高校は5校,1年生～3年生の計12学級,計367名(男子140名,女子227名)を対象とし,中学校と高校の合計は711名であった。そのうち,部活動に所属し,かつ回答に不備のなかった中学生304名(運動部260名,文化部44名),高校生334名(運動部248名,文化部86名)について分析を行った。

調査内容

①部活動の所属とレベル,先輩後輩関係の有無について 部活動に所属しているか否か,また部活動に所属している場合は部活動の名称³と,先輩後輩関係の存在の有無について書くように求めた。先輩後輩関係の存在については,「所属している部活動に先輩後輩関係は存在していますか」という項目で尋ねた。なお,部活動に所属をしていない,あるいは所属している部活動に先輩後輩関係が存在していないと答えた生徒は,以下の質問について答える必要がないとした。

②部活動における先輩後輩関係尺度 予備調査で作成した「部活動における先輩後輩関係尺度」の22項目について,「いつも行われている(4点)」、「ときどき行

² 部活動の活動レベルとは,競技やコンクールの結果に基づくレベルである。レベルは,(1)全国大会上位(ベスト8以上),(2)全国大会出場,(3)県大会,(4)地区大会,(5)試合やコンクールなしの5段階に分けた。

³ 本研究が対象とした部活動の種類については,運動部が「バスケットボール」「野球」「サッカー」「卓球」「バドミントン」「ソフトテニス」「テニス」「陸上」「バレーボール」「剣道」「アーチェリー」「ソフトボール」「空手」「自転車」「ラグビー」「バトントワリング」であった。文化部については,「吹奏楽」「美術」「書道」「茶道」「演劇」「調理」「新聞」「インターネット」「商業研究」「科学」「漫画研究」「写真」「被服」であった。

われている(3点)、「たまに行われている(2点)」、「全く行われていない(1点)」の4件法で回答を求めた。

③部活動の活動内容・特徴尺度 予備調査で作成した「部活動の活動内容・特徴尺度」の23項目について、「かなりあてはまる(4点)」、「だいたいあてはまる(3点)」、「少しあてはまる(2点)」、「全くあてはまらない(1点)」の4件法で回答を求めた。

調査時期および実施方法 調査は2011年7月から10月に実施した。調査の手続きは、調査対象者が在籍する学級単位で、授業時間を用いて集団で実施された。その他の手続きは予備調査と同様の手続きで行った。統計処理には、SPSS (Version19.0)を使用した。

結果

検討を行う上での前提として、中学校と高校の部活動において、どの程度先輩後輩関係が存在しているかを調査した。

その結果、先輩後輩関係が存在していると答えた者は、中学校で262名(86%)、高校で281名(84%)であり、中学校も高校もほぼ同様の割合であった。さらに、部活動のタイプに分けて算出したところ、中学校では運動部の86%、文化部の91%で先輩後輩関係が存在しており、高校では、運動部の90%、文化部の66%で先輩後輩関係が存在していることが確認された。運動部は中学校・高校ともにほぼ同程度の結果を示したが、文化部は中学校で91%もの高い割合であったにもかかわらず、高校においては66%となり、大きく減少していた。

1. 部活動における先輩後輩関係尺度の検討

はじめに、部活動における先輩後輩関係尺度の22項目について、分析を行った。項目の偏りを検討するため、平均値が1.5以下または3.5以上の項目、また、平均値±1標準偏差の値が測定値の上限値を上回っている項目、もしくは下限値を下回っている項目、さらに、頻度について、正規分布において特定の度数に70%以上が集約する項目を検討した結果、平均値が1.5以下であった2項目を削除した。さらに、各項目間の相関係数を算出したところ、.70を超えるような高い相関係数は見られなかった。

続いて、残った20項目について、因子分析(最尤法、Promax回転)を行った。固有値の減少推移(7.03,2.81,1.73,1.32,1.08,...)と因子の解釈可能性から、3因子解が妥当であると判断した。次に、因子負荷量が.40以下の項目および2因子間にわたって.40以上の因子負荷量を示した2項目を削除した。残された18項目について因子分析(最尤法、Promax回転)を行い、その結果、3因子が

抽出された(Table 1)。

次に、項目の特徴から抽出された3因子について命名を行った。第1因子は「先輩が中心となって後輩を引っ張っている」や「先輩は責任感を持って部の発展に努めている」、「後輩は先輩の姿に憧を抱いている」などの項目を含み、先輩から後輩、後輩から先輩への視点でリーダーとフォロワーに関する様子が示されていることから、「リーダーシップとフォロワーシップ」と命名した。第2因子は「先輩の言うことは何事も絶対である」や「後輩は練習の準備と片づけを行っている(行わなければならない)」などの項目を含んでおり、先輩後輩関係における規則や、先輩を優先し敬わなければならない様子が示されていることから、「先輩後輩関係における規律」と命名した。そして、第3因子は、「後輩は先輩に悩みを相談することができる」や「先輩と後輩は部活動だけでなく学校生活でも関わりが強い」などの項目を含み、先輩と後輩のコミュニケーションやつながりについて示されていることから、「先輩・後輩間のコミュニケーション」と命名した。

これら3因子について、信頼性係数としてCronbachの α 係数を算出し、第1因子は $\alpha = .88$ 、第2因子は $\alpha = .74$ 、第3因子は $\alpha = .76$ であった。第1因子については.80以上の α 係数が算出されており、十分な内的整合性が得られた。第2因子と第3因子も.70以上の α 係数が算出され、一定程度の内的整合性が得られた。

2. 部活動の活動内容・特徴尺度の検討

次に、部活動の活動内容・特徴尺度の22項目について、分析を行った。実際に調査に用いたのは23項目であったが、その中には、「先輩と後輩の仲が良い」という項目が含まれており、後の分析において、部活動における先輩後輩関係尺度の項目との重複が懸念された。そのため、以後の分析に与える影響を考慮して、この時点で上記の項目を取り除き、以下の分析を行った。

まず、項目の偏りを検討するため、平均値が1.5以下または3.5以上の項目、また、平均値±1標準偏差の値が測定値の上限値を上回っている項目、もしくは下限値を下回っている項目、さらに、頻度について、正規分布において特定の度数に70%以上が集約する項目を検討した結果、平均値が1.5以下であった2項目を削除した。さらに、各項目間の相関係数を算出したところ、.70を超えるような高い相関係数は見られなかった。また、繰り返し因子分析を行っていく中で、他の因子との因子間相関が極端に低く、常に特定の2項目のみで因子を形成する異質な項目があったため、

Table 1 部活動における先輩後輩関係尺度の因子分析結果 (プロマックス回転) と因子間相関

項目	I	II	III
I リーダーシップとフォロワーシップ ($\alpha = .88$)			
18. 先輩が中心となって後輩を引っ張っている	.84	-.01	-.12
10. 先輩は責任感を持って部の発展に努めている	.82	-.08	-.04
14. 先輩は後輩のことを考えてアドバイスをしている	.69	-.02	.12
8. 後輩は先輩の姿に憧れを抱いている	.58	.17	.13
4. 後輩は先輩の姿を手本にしている	.58	.18	.11
20. 後輩はわからないことを先輩に聞くことができる	.55	-.11	.29
6. 先輩は常に後輩のことを考えて行動している	.53	-.02	.17
II 先輩後輩関係における規律 ($\alpha = .74$)			
11. 後輩は先輩よりも早く練習に来なければならない	-.10	.66	.02
7. 何事にも先輩が優先である	.18	.64	-.14
19. 先輩の言うことは何事も絶対である	.21	.58	-.17
9. 後輩は制服, ジャージ, カバンなどの身なりが制限されている	.02	.52	-.04
13. 後輩は遠征やその他の移動の際に, 先輩の荷物を持たなければならない	-.17	.48	.15
5. 後輩は練習の準備と片づけを行っている (行わなければならない)	.06	.43	.11
3. 先輩は後輩に名前の呼び方を限定させている	-.14	.42	.20
III 先輩・後輩間のコミュニケーション ($\alpha = .76$)			
16. 後輩は先輩に悩みを相談することができる	.23	-.18	.65
12. 先輩と後輩は部活動だけでなく学校生活でも関わりが強い	-.11	.32	.62
22. 後輩は先輩から部活動に関わること以外のことも教えてもらっている	.08	.05	.59
2. 先輩は後輩に積極的にコミュニケーションを図っている	.17	-.05	.55
因子間相関	I	—	.47
	II	—	.27
	III	—	—

それらに関しても削除を行った。

続いて, 残った 18 項目に関して, 因子分析 (最尤法, Promax 回転) を行った。固有値の減少推移 (6.23, 3.84, 1.66, 1.30, 1.21, …) と因子の解釈可能性から, 4 因子解が妥当であると判断した。次に, 因子負荷量が .40 以下の項目および 2 因子間にわたって .40 以上の因子負荷量を示した 2 項目を削除した。残された 16 項目について因子分析 (最尤法, Promax 回転) を行い, その結果 4 因子が抽出された (Table 2)。

次に, 項目の特徴から, 抽出された 4 因子について命名を行った。第 1 因子は「部には厳しい決まりや運営方針がある」や「部の『伝統』と言えるものがある」などの項目を含み, 部活動の活動上の方針や性格を示していることから, 「部の方針・性格」と命名した。第 2 因子は「顧問の先生は協力的かつ熱心に関わっている」や「顧問の先生を信頼している」などの項目を含み, 顧問の関わり方や顧問への信頼感を示していることから, 「顧問の関わり」と命名した。第 3 因子は「活動中の雰囲気はいつも良い」や「同学年のメンバー間の仲が良い」などの項目を含み, 活動における部員間の雰囲気の良さを示していることから, 「部員間の雰

気の良さ」と命名した。第 4 因子は「部員一人ひとりの意志や意見を大切にしている」や「運営は生徒が主体となって行っている」などの項目を含み, 部の活動に対する部員の主体的な関わりを示していることから, 「部員の主体的な関わり」と命名した。

それら 4 因子について, 信頼性係数として Cronbach の α 係数を算出し, 第 1 因子は $\alpha = .84$, 第 2 因子は $\alpha = .79$, 第 3 因子は $\alpha = .75$, 第 4 因子は $\alpha = .72$ であった。第 1 因子については .80 以上の α 係数が算出されており, 十分な内的整合性が得られた。その他の 3 因子も .70 以上の α 係数が算出され, 一定程度の内的整合性が得られた。以上の分析は全て下位尺度ごとにて得点を算出し, 分析を行った。

3. 両尺度の独立性の確認

作成した尺度の独立性を確認するため, 「部活動における先輩後輩関係尺度 (3 因子)」の 18 項目と, 「部活動の活動内容・特徴尺度 (4 因子)」の 16 項目を合わせた全 34 項目について, 一斉に因子分析 (最尤法, Promax 回転) を行った。

その結果, 両尺度の因子構造と同様に, 7 因子に弁別された (Table 3)。2 因子間にわたって .40 以上の因

Table 2 部活動の活動内容・特徴尺度の因子分析結果（プロマックス回転）と因子間相関

項目	I	II	III	IV
I 部の方針・性格 ($\alpha = .84$)				
22. 部には厳しい決まりや運営方針がある	.78	-.04	-.16	-.06
18. 部の「伝統」と言えるものがある	.71	.09	-.13	-.10
3. 部全体ではっきりとした目標を持って日々活動に取り組んでいる	.64	.04	.13	-.02
6. 部として挨拶や礼儀を徹底している	.61	-.08	.20	.01
11. 目標達成のために部全体でよくミーティングを行っている	.56	.12	.17	-.07
15. 部全体で部員は同じ目標を共有している	.52	-.02	.15	-.02
II 顧問の関わり ($\alpha = .79$)				
1. 顧問の先生は協力的かつ熱心に関わっている	.17	.90	-.18	-.10
5. 顧問の先生を信頼している	-.14	.85	.06	.03
9. 顧問は練習がある日は毎日来ている	.15	.48	.01	-.08
III 部員間の雰囲気の良い ($\alpha = .75$)				
10. 活動中の雰囲気がいつも良い	.01	.10	.76	-.01
8. 同学年のメンバー間の仲が良い	.11	.17	.74	-.02
7. お互いに高め合う雰囲気がある	.03	.21	.65	.12
14. お互いを尊重し合う雰囲気がある	.00	-.08	.53	.02
IV 部員の主体的な関わり ($\alpha = .72$)				
23. 部員一人ひとりの意志や意見を大切にしている	-.21	.24	-.12	.76
2. 運営は生徒が主体となって行っている	-.02	-.07	.09	.65
20. 部員が自ら考え、行動する場面が多い	.22	.05	.12	.55
因子間相関				
	I	—	.59	.51
	II	—	-.29	-.34
	III	—	—	.55
	IV	—	—	—

子負荷量を示した項目はなく、因子・項目の重複は見られなかった。なお、これら7因子についても、信頼性係数としてCronbachの α 係数を算出した。各因子の下位尺度の構成は、単独で行った因子分析の際と同様のため、 $\alpha = .72 \sim .88$ の十分な内的整合性が得られた。以上の結果から、両尺度は因子・項目の重複のない独立した尺度であることが確認された。

4. 先輩後輩関係の学年差と性差

先輩後輩関係は、学年によって立場が異なることから、先輩後輩関係に対する認知も異なる可能性がある。また、性別による違いも予測される。そのため、中学生と高校生の部活動における先輩後輩関係の下位尺度について、それぞれ学年および性別の平均得点を出し、学年×性の2要因の分散分析を行った (Table 4, Table 5)。

まず中学生においては、いずれの下位尺度においても交互作用が認められなかった。主効果の検定を行ったところ、「リーダーシップとフォロワーシップ」($F(2, 235) = 14.05, p < .01$)、「先輩後輩関係における規律」($F(2, 235) = 3.09, p < .05$)、「先輩・後輩間のコミュニケーション」($F(2, 235) = 4.56, p < .01$)の全ての下位尺度において

学年の有意な主効果が認められた。多重比較の結果、「リーダーシップとフォロワーシップ」では2年生・3年生よりも1年生の得点が高く(それぞれ、 $p < .01$)、「先輩後輩関係における規律」では3年生よりも1年生の得点が高かった($p < .05$)。また、「先輩・後輩間のコミュニケーション」では2年生よりも3年生の得点が高かった($p < .01$)。性別においては、「先輩後輩関係における規律」($F(1, 235) = 4.89, p < .01$)においてのみ有意な主効果が認められ、男子よりも女子の方が得点が高かった($p < .01$)。

続いて高校生では、中学生と同様にいずれの下位尺度においても交互作用は認められなかった。主効果の検定を行ったところ、「リーダーシップとフォロワーシップ」($F(2, 295) = 8.43, p < .01$)、「先輩後輩関係における規律」($F(2, 295) = 13.25, p < .01$)、において学年の有意な主効果が認められた。多重比較の結果、「リーダーシップとフォロワーシップ」では3年生よりも1年生の得点が高く($p < .01$)、「先輩後輩関係における規律」では2年生・3年生よりも1年生の得点が高かった(それぞれ、 $p < .01$)。性別においては、いずれの下位尺度においても有意な主効果は認められなかった。

Table 3 「部活動における先輩後輩関係尺度」および「部活動の活動内容・特徴尺度」の独立性確認のための因子分析結果（プロマックス回転）と因子間相関

項目		I	II	III	IV	V	VI	VII
活動における先輩後輩関係尺度	I リーダーシップとフォロワーシップ ($\alpha = .88$)							
	18. 先輩が中心となって後輩を引っ張っている	.73	-.03	-.09	-.02	.01	.09	-.17
	10. 先輩は責任感を持って部の発展に努めている	.73	-.11	-.11	.25	.01	.30	-.06
	14. 先輩は後輩のことを考えてアドバイスをしている	.64	-.03	.13	.09	-.10	.03	-.01
	8. 後輩は先輩の姿に憧れを抱いている	.60	.17	.16	-.12	.04	-.13	-.01
	4. 後輩は先輩の姿を手本にしている	.59	.16	.10	.00	.09	-.12	-.01
	20. 後輩はわからないことを先輩に聞くことができる	.56	-.11	.25	.11	-.05	-.10	.07
	6. 先輩は常に後輩のことを考えて行動している	.48	.06	.19	-.19	.10	.09	.10
	II 先輩後輩関係における規律 ($\alpha = .74$)							
	11. 後輩は先輩よりも早く練習に来なければならない	-.05	.64	.00	-.06	-.06	.11	-.09
7. 何事にも先輩が優先である	.20	.61	-.14	.02	.05	.02	.05	
19. 先輩の言うことは何事も絶対である	.23	.54	-.13	-.06	.06	.10	-.09	
9. 後輩は制服, ジャージ, カバンなどの身なりが制限されている	.03	.50	-.10	.18	-.04	.00	.07	
13. 後輩は遠征やその他の移動の際に, 先輩の荷物を持たなければならない	-.10	.49	.13	-.02	.05	-.04	.00	
5. 後輩は練習の準備と片づけを行っている (行わなければならない)	.04	.45	.07	-.05	-.02	.00	-.02	
3. 先輩は後輩に名前呼び方を限定させている	-.16	.41	.09	.27	-.10	-.06	.06	
III 先輩・後輩間のコミュニケーション ($\alpha = .76$)								
16. 後輩は先輩に悩みを相談することができる	.22	-.20	.66	.15	-.10	-.05	-.11	
12. 先輩と後輩は部活動だけでなく学校生活でも関わりが強い	-.16	.31	.56	.04	.04	.06	.19	
22. 後輩は先輩から部活動に関わること以外のことも教えてもらっている	.12	.03	.59	.00	.00	-.01	-.08	
2. 先輩は後輩に積極的にコミュニケーションを図っている	.13	-.08	.55	.00	.03	-.03	.05	
IV 部の方針・性格 ($\alpha = .84$)								
22. 部には厳しい決まりや運営方針がある	-.12	.31	.01	.69	-.05	-.02	-.08	
18. 部の「伝統」と言えるものがある	.03	.08	.10	.65	.04	-.13	-.15	
3. 部全体ではっきりとした目標を持って日々活動に取り組んでいる	.02	-.07	-.07	.64	.06	.17	.00	
6. 部として挨拶や礼儀を徹底している	.12	.04	.03	.61	-.10	.19	.01	
11. 目標達成のために部全体でよくミーティングを行っている	.18	-.15	-.05	.50	.17	.13	-.06	
15. 部全体で部員は同じ目標を共有している	.00	.11	.07	.53	-.02	.09	-.08	
V 顧問の関わり ($\alpha = .79$)								
1. 顧問の先生は協力的かつ熱心に関わっている	-.07	.03	-.02	.13	.91	-.16	-.07	
5. 顧問の先生を信頼している	.00	-.02	.00	-.08	.84	.06	.02	
9. 顧問は練習がある日は毎日来ている	.04	.00	.02	.14	.51	.03	-.12	
VI 部員間の雰囲気の良い ($\alpha = .75$)								
10. 活動中の雰囲気はいつも良い	.21	.03	-.06	.03	.12	.70	.00	
8. 同学年のメンバー間の仲が良い	-.08	.05	.13	.09	.17	.69	-.04	
7. お互いに高め合う雰囲気がある	.02	.08	.18	.05	.22	.67	.13	
14. お互いを尊重し合う雰囲気がある	.19	-.06	.12	.00	-.04	.50	.08	
VII 部員の主体的な関わり ($\alpha = .72$)								
23. 部員一人ひとりの意志や意見を大切にしている	.10	.10	-.03	-.22	.21	-.10	.67	
2. 運営は生徒が主体となって行っている	-.12	.00	-.03	-.03	-.08	.11	.64	
20. 部員が自ら考え, 行動する場面が多い	-.10	.01	-.06	.19	.05	.10	.51	
因子間相関		I	—	.44	.61	.43	.17	.19
		II	—	—	.25	.51	-.16	.22
		III	—	—	—	.42	.19	.43
		IV	—	—	—	—	.57	.49
		V	—	—	—	—	—	-.29
		VI	—	—	—	—	—	.53
		VII	—	—	—	—	—	—

Table 4 中学生の先輩後輩関係の学年差・性差

	1年生 (N=71)				2年生 (N=117)				3年生 (N=72)				全体 (N=260)		F値			多重比較
	男子 (N=39)		女子 (N=32)		男子 (N=48)		女子 (N=69)		男子 (N=30)		女子 (N=42)		M	SD	学年	性別	交互作用	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD						
リーダーシップと フォロワーシップ	3.49	.53	3.36	.53	2.73	.68	3.04	.54	2.67	.70	2.92	.70	2.96	.66	14.05**	2.48	1.98	1年生>2年生・3年生
先輩後輩関係に おける規律	2.54	.69	2.61	.55	2.30	.59	2.51	.65	2.10	.54	2.42	.64	2.41	.62	3.09*	4.89*	.50	1年生>3年生 女子>男子
先輩・後輩間のコ ミュニケーション	2.72	.77	2.71	.83	2.33	.68	2.53	.68	2.64	.56	2.76	.73	2.55	.71	4.56**	.99	.36	3年生>2年生

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 5 高校生の先輩後輩関係の学年差・性差

	1年生 (N=101)				2年生 (N=85)				3年生 (N=87)				全体 (N=273)		F値			多重比較
	男子 (N=35)		女子 (N=66)		男子 (N=36)		女子 (N=49)		男子 (N=32)		女子 (N=55)		M	SD	学年	性別	交互作用	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD						
リーダーシップと フォロワーシップ	3.27	.58	3.37	.82	2.97	.66	3.16	.67	2.97	.68	2.76	.75	3.10	.74	8.43**	.08	1.61	1年生>3年生
先輩後輩関係に おける規律	2.71	.68	2.59	.77	2.18	.53	2.32	.75	2.19	.61	2.08	.62	2.36	.71	13.25**	.13	.88	1年生>2年生・3年生
先輩・後輩間のコ ミュニケーション	2.96	.69	2.94	.89	2.94	.66	2.69	.75	2.98	.73	2.52	.88	2.82	.81	1.32	5.51	1.53	

** $p < .01$

5. 部のタイプとレベルによる先輩後輩関係の違い

部活動のタイプ(運動部および文化部)と部活動の競技・コンクールにおけるレベルに基づく先輩後輩関係の違いを検討するため、中学生と高校生の部活動における先輩後輩関係の下位尺度について、それぞれ部活動のタイプとレベルに分けて平均得点を出し、部活動のタイプ×レベルの2要因の分散分析を行った (Table 6, Table 7)。

その結果、まず中学生においては、いずれの下位尺度においても交互作用は認められなかった。主効果の検定を行ったところ、部活動のタイプにおいて、「リーダーシップとフォロワーシップ」($F(1, 262)=6.72$, $p < .01$), 「先輩後輩関係における規律」($F(1, 262)=7.89$,

$p < .01$) に有意な主効果が認められ、多重比較の結果、どちらも文化部よりも運動部の得点が高かった ($p < .01$)。

次に、部活動のレベルでは、「リーダーシップとフォロワーシップ」($F(4, 262)=8.34$, $p < .01$), 「先輩後輩関係における規律」($F(4, 262)=9.90$, $p < .01$), 「先輩・後輩間のコミュニケーション」($F(4, 262)=10.69$, $p < .01$)の全ての下位尺度において有意な主効果が認められた。多重比較の結果、「リーダーシップとフォロワーシップ」では、試合やコンクールなし (以下、試合なし) よりも全国大会上位・全国大会出場・県大会・地区大会の得点が高く (それぞれ, $p < .01$), 「先輩後輩関係における規律」では、県大会・地区大会・試合なしよりも全国大会上

Table 6 中学生の部活動のタイプ・レベルによる先輩後輩関係の違い

	運動部 (N=222)										文化部 (N=40)										F値	多重比較					
	(A) 全国大会上位 (N=36)		(B) 全国大会出場 (N=36)		(C) 県大会 (N=57)		(D) 地区大会 (N=74)		(E) 試合なし (N=19)		(A) 全国大会上位 (N=7)		(B) 全国大会出場 (N=8)		(C) 県大会 (N=7)		(D) 地区大会 (N=8)		(E) コンクールなし (N=10)				M	SD	タイプ	レベル	交互作用
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD							
リーダーシップと フォロワーシップ	3.43	.46	3.32	.50	3.30	.49	3.25	.49	2.81	.61	2.97	.34	2.95	.32	3.01	.42	2.79	.40	2.25	.38	3.01	.46	6.72**	8.34**	1.52	運動部>文化部 A・B・C・D>E	
先輩後輩関係に おける規律	3.29	.62	3.23	.45	2.46	.58	2.40	.63	2.29	.45	2.82	.38	2.74	.34	2.12	.40	2.08	.42	1.96	.40	2.54	.51	7.89**	9.90**	.86	運動部>文化部 A・B>C・D・E	
先輩・後輩間のコ ミュニケーション	3.20	.69	2.70	.71	2.73	.70	2.30	.67	2.07	.67	3.27	.37	2.79	.40	2.84	.35	2.37	.34	2.06	.41	2.63	.58	1.24	10.69**	1.44	A>B・C・D・E; B・C>D・E	

** $p < .01$

Table 7 高校生の部活動のタイプ・レベルによる先輩後輩関係の違い

	運動部 (N=223)										文化部 (N=58)										F値	交互作用	多重比較			
	(A)		(B)		(C)		(D)		(E)		(A)		(B)		(C)		(D)		(E)							
	全国大会 上位 (N=53)	全国大会 出場 (N=47)	県大会 (N=47)	地区大会 (N=53)	試合なし (N=23)	全国大会 上位 (N=10)	全国大会 出場 (N=10)	県大会 (N=12)	地区大会 (N=11)	コンクール なし (N=15)	全体 (N=281)															
M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	タイプ	レベル			
リーダーシップと フォロワーシップ	3.40	.51	3.38	.54	3.24	.51	3.18	.43	2.51	.60	3.08	.39	3.09	.33	2.91	.41	2.85	.38	2.15	.38	2.98	.46	7.54**	9.17**	1.42	運動部>文化部 A・B・C・D>E
先輩後輩関係に おける規律	2.95	.60	2.86	.51	2.61	.56	2.31	.53	1.83	.45	2.50	.41	2.48	.34	2.21	.43	1.93	.40	1.63	.38	2.33	.50	10.03**	9.34**	.65	運動部>文化部 A・B>D・E; C>E
先輩・後輩間のコ ミュニケーション	3.37	.54	3.32	.64	3.04	.67	2.71	.49	2.10	.66	2.85	.36	2.77	.38	2.56	.37	2.30	.33	1.65	.40	2.67	.51	8.13**	11.24**	.49	A・B>D・E; C・D>E

** $p < .01$

位・全国大会出場の得点が高かった (それぞれ, $p < .01$)。「先輩・後輩間でのコミュニケーション」では, 全国大会出場・県大会・地区大会・試合なしよりも全国大会上位の得点が高かった (それぞれ, $p < .01$)。また, 地区大会・試合なしよりも全国大会出場・県大会の得点が高かった (それぞれ, $p < .01$)。

続いて高校生では, 中学生と同様にいずれの下位尺度においても交互作用は認められなかった。主効果の検定を行ったところ, 部活動のタイプにおいて, 「リーダーシップとフォロワーシップ」($F(1, 281) = 7.54, p < .01$), 「先輩後輩関係における規律」($F(1, 281) = 10.03, p < .01$), 「先輩・後輩間のコミュニケーション」($F(1, 281) = 8.13, p < .01$) の全ての下位尺度に有意な主効果が認められ, 多重比較の結果, 全て文化部よりも運動部の得点が高かった ($p < .01$)。

また, 部活動のレベルにおいても「リーダーシップとフォロワーシップ」($F(4, 281) = 9.17, p < .01$), 「先輩後輩関係における規律」($F(4, 281) = 9.34, p < .01$), 「先輩・後輩間のコミュニケーション」($F(4, 281) = 11.24, p < .01$) の全ての下位尺度において有意な主効果が認められた。多重比較の結果, 「リーダーシップとフォロワーシップ」では試合なしよりも全国大会上位・全国大会出場・県大会・地区大会の得点が高かった (それぞれ, $p < .01$)。「先輩後輩関係における規律」では, 地区大会・試合なしよりも全国大会上位・全国大会出場の得点が高く, 試合なしよりも県大会の得点が高かった (それぞれ, $p < .01$)。また, 「先輩・後輩間のコミュニケーション」では, 地区大会・試合なしよりも全国大会上位・全国大会出場の得点が高く, 試合なしよりも県大会・地区大会の得点が高かった (それぞれ, $p < .01$)。

6. 部活動の活動内容・特徴による先輩後輩関係の予測

「部活動の活動内容・特徴尺度」が「部活動における先輩後輩関係尺度」を構成する3変数(「リーダーシップ

とフォロワーシップ」, 「先輩後輩関係における規律」, 「先輩・後輩間のコミュニケーション」)をどの程度予測するかどうかを調べるため, 「部活動の活動内容・特徴尺度」の下位尺度を説明変数, 「部活動における先輩後輩関係尺度」を基準変数として重回帰分析を学校段階別に行った。「部活動の活動内容・特徴尺度」の下位尺度から「部活動における先輩後輩関係尺度」への重決定係数 (R^2), および各下位尺度の標準偏回帰係数 (β) をまとめたものをパス図に示した (Figure 1, Figure 2)。

その結果, 中学生では, 重決定係数が部活動における先輩後輩関係尺度の各下位尺度の全てにおいて有意な値を示し ($R^2 = .27 \sim .46$), 標準偏回帰係数は「顧問の関わり」以外のいずれかの下位尺度で有意な値を示した。最も高い値を示したのは, 「部の方針・性格」から「先輩後輩関係における規律」($\beta = .43, p < .01$) であり, 「部の方針・性格」は他にも「リーダーシップとフォロワーシップ」($\beta = .30, p < .01$), 「先輩・後輩間のコミュニケーション」($\beta = .24, p < .01$) と, 部活動における先輩後輩関係尺度の下位尺度全てに有意な値を示した。また, 「部員間の雰囲気の良い」は「先輩・後輩間のコミュニケーション」($\beta = .37, p < .01$) に対して有意な値を示し ($p < .01$), 「部員の主体的な関わり」は「リーダーシップとフォロワーシップ」($\beta = .42, p < .01$) に対して有意な値を示した。

高校生では, 重決定係数が部活動における先輩後輩関係尺度の各下位尺度の全てにおいて有意な値を示し ($R^2 = .28 \sim .56$), 標準偏回帰係数は「顧問の関わり」以外のいずれかの下位尺度で有意な値を示した。最も高い値を示したのは, 「部の方針・性格」から「先輩後輩関係における規律」($\beta = .52, p < .01$) であった。中学生同様に, 「部の方針・性格」はその他に「リーダーシップとフォロワーシップ」($\beta = .34, p < .01$), 「先輩・後輩間のコミュニケーション」($\beta = .41, p < .01$) と, 部活動における先輩後輩関係尺度の下位尺度全てに高い値を示した。

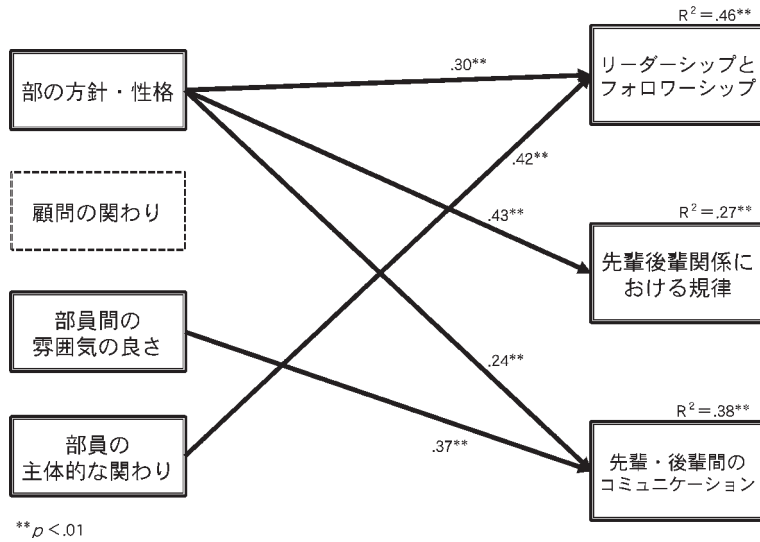


Figure 1 中学生の部活動の活動内容・特徴による先輩後輩関係の予測 (有意なパスのみを示している)

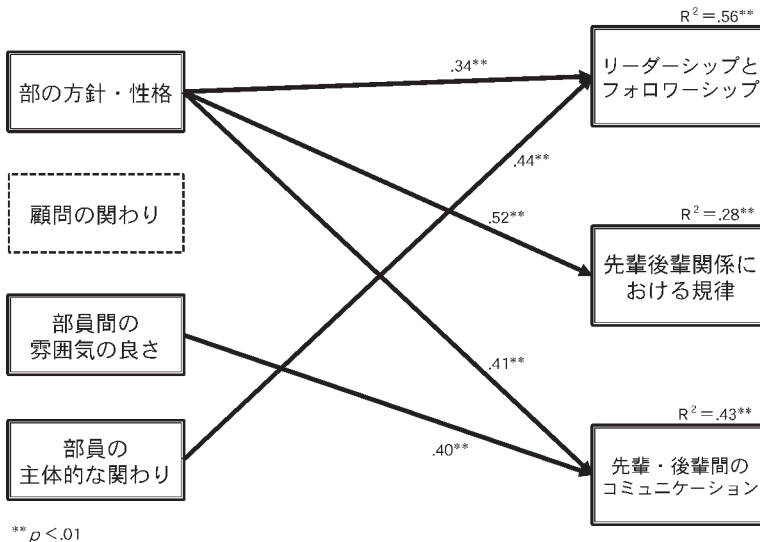


Figure 2 高校生の部活動の活動内容・特徴による先輩後輩関係の予測 (有意なパスのみを示している)

また、「部員間の雰囲気の良い」は「先輩・後輩間のコミュニケーション」($\beta = .40, p < .01$)に対して有意な値を示し ($p < .01$)、「部員の主体的な関わり」は「リーダーシップとフォロワーシップ」($\beta = .44, p < .01$)に対して有意な値を示した。なお、VIF 値は 1.13~1.63 であり、多重共線性については問題ないと言える。

考 察

本研究の目的は、中学校と高校の部活動における先輩後輩関係の構造を明らかにし、また学年や性別、部活動のタイプやレベルによって先輩後輩関係にどのような違いが生じているのか、さらに先輩後輩関係が、部活動の活動内容や特徴によってどの程度予測されるのか明らかにすることであった。

1. 先輩後輩関係の学年差と性差

最も低学年(下級生)である1年生は、フォロワーの立場から、リーダーである先輩(上級生)の影響を他の学年よりも受けやすいことが推察できる。このことから、1年生は中学・高校という学校段階に限らず、他学年に比べて先輩後輩関係を感じやすい立場に置かれていることが示唆された。1年生は立場上、先輩からの指示や指摘を受けることが多い。それを踏まえると、リーダーシップとフォロワーシップの機能はもちろんのこと、指示や指摘を受けている分、先輩後輩関係を厳しく感じる機会も多いであろう。その反面、先輩はリーダーとフォロワーの関係性や厳しきの強弱自体を、あまり認識せずに後輩に接している可能性が考えられる。

続いて、性差に関する検討では、中学生において女子の方が先輩後輩関係における規律が高いことが示された。性差は全体を通して、このように中学生の先輩後輩関係における規律にしか見られず、中学生の女子の先輩後輩関係の特徴として指摘することができる。また、上記の学年差の検討と合わせて考えると、1年生の女子は、より先輩後輩関係の規律を高く感じやすい立場にあることが窺える。

しかしながら、なぜ、このように中学生の女子の先輩後輩関係の規律が高いのか、今回の検討だけでは十分に明らかにすることはできない。大学生を対象とした先行研究では、女子よりも男子の方が厳しい対後輩行動を起こすことが示されていた(新井・松井, 2004)。この結果を一概に比較することはできないが、本研究で得た知見も踏まえ、このような違いが生じる原因について、今後、さらに詳細な検討を行う必要があるだろう。

2. 運動部と文化部の先輩後輩関係の違い

運動部は中学生の「リーダーシップとフォロワーシップ」、「先輩後輩関係における規律」、高校生の「リーダーシップとフォロワーシップ」、「先輩後輩関係における規律」、「先輩・後輩間のコミュニケーション」において文化部よりも得点が高く、運動部の方が先輩後輩関係が明確な状況にあることが明らかになった。

これは、後述するような部活動のレベルについての議論とも関連し、文化部は運動部よりも相対的に競争を伴う部活動が少ないことが影響していると考えられる。加えて、活動日数や活動時間を見ても、運動部の方が活動日数・時間が多く(ベネッセ教育研究開発センター, 2009)、先輩と後輩がともに過ごす時間の違いも影響している可能性が指摘できる。

これまでも、運動部と文化部は異なる集団的性質・特徴を持っていることが示されてきたが(例えば石田・亀山, 2006)、先輩後輩関係についても運動部と文化部では異なる実態にあることが明らかにされた。先述した先輩後輩関係の存在に関する調査結果においては、高校の文化部では先輩後輩関係が「存在する」と答えた部活動は66%に留まっており、先輩後輩関係が存在していない部活動も一定数あることが示されている。このことから、そもそも文化部では運動部に比べて明確な先輩後輩関係が認められにくいことが考えられる。

3. 部活動のレベルと先輩後輩関係の関連

試合やコンクールがない部活動は相対的に得点が低かった。このことから、目標が無い、あるいは競うことを目的としない部活動は、明確な先輩後輩関係がなく、緩く、フラットな関係であることが示唆された。

一方で、レベルが上がるほど得点は高く、特に高校生においては全国大会レベルの部活動では高い傾向が示された。友添(2013)は、部活動における「勝利追求」行為は、部活動集団の封建性の基盤となり得ることを指摘している。このことから、より高いレベルで結果を求める部活動においては、その勝利追求の姿勢が先輩後輩関係にも反映され、大きな影響を及ぼしていることが推察できる。部活動の競技などの種類にもよるが、一般的に試合に出るためのメンバー争いはどこにおいても存在しているであろうし、競技レベルが上がれば上がるほど競争も激化することは予測できる。したがって、本研究の結果からは、「勝利追求」の姿勢や、それに派生する「競争」というものが、先輩後輩間でのコミュニケーションの機会を増やし、一方で厳しさを助長する要因になり得ることが示唆された。

4. 部活動の活動内容・特徴による先輩後輩関係の予測

「部の方針・性格」は、「部活動における先輩後輩関係尺度」の全ての下位尺度に有意な値を示し、部の方針や性格が、先輩後輩関係の各側面を高く予測することが明らかになった。このことに関連して、森川・遠藤(1989)は、部員らが部の活動方針を策定する際に、「先輩後輩関係をどのように位置づけるのか」ということが、重要な課題としてあげられることを指摘している。さらには、明確な目的や規則を持ち、競技志向の高いサークル集団・部活動において先輩後輩関係が促進されやすいことも示唆されている(新井・松井, 2004・2006; 友添, 2013)。これらの指摘も踏まえて考えると、部員たち自身が、先輩後輩関係を活動における「方針」

や「規則」の一つとして、意識的に作り出していることが推察される。そのことによって、部の組織強化を図っているとも考えられる。したがって、先輩後輩関係は、各個人間の関係の中だけで収束されるものではなく、集団づくりや組織運営といった、部の集団全体のあり方との関連から形成されているとも言えよう。

また、その中でも「部の方針・性格」だけが、「先輩後輩関係における規律」を予測する点にも注目しておきたい。「問題と目的」で触れたような、先輩後輩関係に関連したいじめなどでは、先輩後輩間に生じる「いきすぎた規律」が原因としてあげられることが多い。しかし、本研究の結果を踏まえると、そのような「いきすぎた規律」が実際に問題視されたとしても、それは部の方針などとの関連から意識的に作り出されているため、それを変革しようと試みても、個人レベルの意識や取り組みだけでは変革することが難しいことが想定される。つまり、それを変革するためには、部の集団全体を通して取り組んでいく必要がある。この点に関しては、さらに個別の事例に焦点を当てて検討する必要があるが、先輩後輩関係における様々なトラブルに対峙する上で、重要な示唆を得ることができたと考える。

次に、「部員間の雰囲気の良い」は、「先輩・後輩間のコミュニケーション」を高く予測することが明らかになった。互いを尊重し合う雰囲気や仲の良さというもの、先輩・後輩間のコミュニケーションをより活発なものにしているものと推察できる。このように、互いに高め合い、一人ひとりを尊重できる雰囲気づくりは、そのまま充実した先輩後輩関係の形成につながる可能性があると言えるだろう。

また、「部員の主体的な関わり」は、「リーダーシップとフォロワーシップ」を高く予測することが明らかになった。これは、活動に対する部員の主体的な関わりが高まることによって、先輩のリーダーとしての行動も積極的になり、そのことが先輩・後輩間のリーダーシップとフォロワーシップの機能を高めているものと推察できる。

注目すべきは、「顧問の関わり」がいずれの下位尺度に対しても、予測を示さなかった点である。これまでの先行研究では、部活動において、顧問の関わり方が重要であることが報告されているが（例えば角谷・無藤, 2001）、本研究の先輩後輩関係に対しては、顧問の関わりによる予測は示されなかった。先行研究で検討された顧問のあり方と、本研究における顧問の関わりは同意ではないため、速断はできないが、先輩後輩関係に

ついては、当事者である部員自身を中心として形成されることが示唆されたと言えよう。

5. 今後の課題

本研究は、中学生と高校生の部活動における先輩後輩関係について、その構造を明らかにし、また、学年や性別、部活動のタイプやレベルによる違い、さらには先輩後輩関係が、部活動の活動内容や特徴によってどの程度予測されるのかを明らかにした。

特に、部活動自体の方針や性格などが、先輩後輩関係を予測することを示しながらも、顧問の関わりが全く予測を示さなかった点は注目に値する。また、競技・コンクールなどで高いレベルで活躍をする部活動や、運動部では、特に先輩後輩関係が明確になることも明らかになった。これにより、これまで実証的に明らかにされてこなかった先輩後輩関係の内実に対して新たな知見が示されたと考える。

今後、中学生と高校生の部活動における先輩後輩関係に対して指導・援助を行う際や、その理解を深めていくためには、学年や性別による捉え方の違いや、部活動の環境やタイプ・レベルを十分に考慮して行う必要がある。

最後に、本研究の今後の課題として以下の4点があげられる。第1に、調査対象者の「学年のバランス」である。本研究の結果にも示されたように、学年によって先輩後輩関係の感じ方には差がある。それゆえに、調査の際の学年の偏りには十分配慮しなければならない。本研究では中学生において2年生が多かったが、これが1年生に偏った場合は、大きくズレが生じる可能性がある。今後は、調査対象者の学年のバランスを留意し、調査を行っていく必要がある。

第2に、運動部と文化部を分けて検討することの必要性があげられる。本研究では双方を合わせて「部活動」とし、運動部と文化部の両方を対象として検討を行った。しかし、運動部と文化部では置かれている環境が大きく異なる上に、本研究の結果からも双方の内実には大きな違いが明らかとなった。今後は、個別の事例を取り上げ、それぞれ詳細な検討を行うことが必要である。

第3に、本研究は、部活動の活動内容や特徴による先輩後輩関係の「予測」の分析に留まり、両者の影響関係については明らかにすることができなかった。部活動のあり方が先輩後輩関係に及ぼす影響については、より重層的かつ複合的な要因が交絡していることが推測される。今後は、複数の調査を重ね、また、インタビューなどの質的検討を行うなどして、両者の影響関

係を明確にしていく必要がある。

第4に、顧問の関わりについて、詳細に検討していく必要がある。本研究の結果から、顧問の関わりは先輩後輩関係をほとんど予測しないことが示されたが、先行研究では部活動における顧問の関わりやリーダーシップの重要性が度々報告されている(例えば角谷・無藤, 2001; 渡辺・大重, 2011)。そのため、今後は、インタビューなどを通して個別の事例を取り上げた検討が必要である。

引用文献

- 青木邦男 (1989). 高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因 体育学研究, **34**, 89-100. (Aoki, K. (1989). Factors affecting senior high school athletes' keeping in or dropping out of their sport team activities. *Japan Journal of Physical Education, Health and Sport Sciences*, **34**, 89-100.)
- 新井洋輔・松井 豊 (2004). サークル集団における対後輩行動の構造 筑波大学心理学研究, **27**, 29-41. (Arai, Y., & Matsui, Y. (2004). The structure of behavior toward *kouhai* (junior members) in university clubs. *Tsukuba Psychological Research*, **27**, 29-41.)
- 新井洋輔・松井 豊 (2006). 対先輩行動の構造の検討—対象となる先輩を特定して— 筑波大学心理学研究, **32**, 11-19. (Arai, Y., & Matsui, Y. (2006). The structure of behavior toward a *senpai* (higher status person) : Specifying the *senpai* as target. *Tsukuba Psychological Research*, **32**, 11-19.)
- 朝日新聞 (1995). 行き過ぎた指導あった 女子生徒自殺で明倫高, 県に報告書 10月18日神奈川朝刊
- 朝日新聞 (2013). 暴力とスポーツ (下) 2月7日朝刊
- ベネッセ教育研究開発センター (2009). 第2回子ども生活実態基本調査報告書 ベネッセ教育総合研究所<http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009/pdf/data_06.pdf> (2015年5月24日)
- Cave, P. (2004). Bukatsudo : The educational role of Japanese school clubs. *Journal of Japanese Studies*, **30**, 383-415.
- 中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議 (1997). 運動部活動の在り方に関する調査研究報告 文部省
- 東野充成 (2003). 部活動と中学生の対人関係—教師・友人関係を中心に— 日本特別活動学会紀要, **11**, 64-74. (Higashino, M. (2003). Club activities and personal relations of junior high school students : Focused on the relations with teachers and friends. *Journal of JASEA*, **11**, 64-74.)
- 稲地裕昭・千駄忠至 (1992). 中学生の運動部活動における退部に関する研究—退部因子の抽出と退部予測尺度の作成— 体育学研究, **37**, 55-68. (Inaji, H., & Senda, T. (1992). A study on dropping out in junior-high school sport team activities : The factors of dropping out and the estimated scale for dropping-out (ESD). *Japanese Journal of Physical Education, Health and Sport Sciences*, **37**, 55-68.)
- 石田靖彦・亀山恵介 (2006). 中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響—部活動集団の特徴と部活動への意欲に着目して— 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, **9**, 219-225. (Ishida, Y., & Kameyama, K. (2006). The effects of extracurricular activities on achievement motivation. *Bulletin of Comprehensive Center for Education Practice*, **9**, 219-225.)
- 神谷 拓 (2007). 必修クラブの制度化と変質過程の分析 スポーツ教育学研究, **26**, 75-88. (Kamaya, T. (2007). Analysis of the establishment of, and changes to, curricular club activities : Focusing on judicial precedents for curricular and extracurricular club activities. *Japanese Journal of Sport Education Studies*, **26**, 75-88.)
- 関西大学人権問題研究室女性問題研究班 (1999). 課外活動とジェンダ(1)—関西大学スポーツ系クラブ・サークルの学生意識調査— 関西大学人権問題研究室紀要, **39**, 1-98.
- 久保正秋 (1980). 運動部集団の原理的考察II—封建性と勝利追求について— 東海大学紀要体育学部, **10**, 1-9. (Kubo, M. (1980). A principle study on athletic group 2 : Feudal character and the pursuit of victory. *Bulletin, Faculty of Physical Education, Tokai University*, **10**, 1-9.)
- 黒須 充 (2007). 総合型地域スポーツクラブの時代1 創文企画
- 宮下一博 (1995). 青年期の同世代関係 落合良行・楠見 孝(編) 講座生涯発達心理学4 自己への問

- い直し—青年期— (pp.155-184) 金子書房
 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領 東山書房
 森川貞夫・遠藤節昭 (1989). 必携スポーツ部活動ハンドブック 大修館書店
 中村敏雄 (2009). 中村敏雄著作集4 部活・クラブ論 創文企画
 岡田有司 (2009). 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響—部活動のタイプ・積極性に注目して— 教育心理学研究, **57**, 419-431. (Okada, Y. (2009). Participation in school-based extracurricular activities and junior high school students' psychosocial adjustment to school: Effect of type of extracurricular activity and extent of involvement. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **57**, 419-431.)
 城丸章夫・水内 宏 (編) (1991). スポーツ部活はいま 青木書店
 角谷詩織・無藤 隆 (2001). 部活動継続者にとっての中学部活動の意義—充実感・学校生活への満足度とのかかわりにおいて— 心理学研究, **72**, 79-86. (Sumiya, S., & Muto, T. (2001). The significance of extracurricular activities in the life of junior high school students. *Japanese Journal of Psychology*, **72**, 79-86.)
 角谷詩織 (2005). 部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか—学業コンピテンスの影響を考慮した潜在的成長曲線モデルから— 発達心理学研究, **16**, 26-35. (Sumiya, S. (2005). Participation in extracurricular activities and students' satisfaction with junior high school: A latent growth curve model. *Japanese Journal of Development Psychology*, **16**, 26-35.)
 竹村明子・前原武子・小林 稔 (2007). 高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係 教育心理学研究, **55**, 1-10. (Takemura, A., Maehara, T., & Kobayashi, M. (2007). Participation in sports clubs and academic goal orientation and adjustment: High school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **55**, 1-10.)
 友添秀則 (2013). 学校運動部の課題とは何か—混乱する学校運動部をめぐる— 現代スポーツ評論, **28**, 8-18.
 渡辺弥生・大重 啓 (2011). 中学生の部活動における顧問のリーダーシップが学校適応に及ぼす影響について 法政大学文学部紀要, **62**, 95-112. (Watanabe, Y., & Oshige, T. (2009). Influences of teachers' leadership style on adjustment to club activities and schools in adolescents. *Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University*, **62**, 95-112.)
 山口正二・岡本貴行・中山 洋 (2004). 高等学校における部活動への参加と学校適応度との関連性に関する研究—学校類型の視点より— カウンセリング研究, **37**, 232-240. (Yamaguchi, S., Okamoto, T., & Nakayama, H. (2004). A study of the relationship between participation in school clubs and school adjustment to senior high school from the viewpoint of school type. *Japanese Journal of Counseling Science*, **37**, 232-240.)
 吉村 斉 (1997). 学校適応における部活動とその人間関係のあり方—自己表現・主張の重要性— 教育心理学研究, **45**, 337-345. (Yoshimura, H. (1997). Human interactions in extracurricular athletic clubs in relation to school adjustment members: The importance of self-assertion. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 337-345.)
 吉村 斉 (2005). 部活動への適応感に対する部員の対人行動と主将のリーダーシップの関係 教育心理学研究, **53**, 151-161. (Yoshimura, H. (2005). Adjustment to club activities: Club members' interpersonal behavior and team captains' leadership style. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **53**, 151-161.)
 吉村 斉 (2010). 部活動への適応感と競技特性の関係—運動部員の対人スキルと主将のリーダーシップに注目して— 青年心理学研究, **22**, 45-56. (Yoshimura, H. (2010). The relationships between members' adjustment to club activities and characteristics of athletic club activities: Focusing on athletic club members' interpersonal skills and their captains' leadership. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **22**, 45-56.)

謝 辞

調査にご協力くださった、中学校・高等学校の諸先生ならびに生徒の皆さまに、心より感謝申し上げます。そして、本論文の着想から執筆に至るまで多大なご協

力とご助言をいただいた，筑波大学大学院教育臨床学
研究室の皆様に厚く御礼申し上げます。

(2013.3.13 受稿, '15.5.24 受理)

Senior-Junior (Senpai-Kohai) Relationships in Secondary School Activities

YUTA ONO (GRADUATE SCHOOL OF SPORT SCIENCES, WASEDA UNIVERSITY) AND
ICHIKO SHOJI (FACULTY OF HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA)
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2015, 63, 438—452

The purposes of the present research were to clarify the structure of relationships between senior and junior members (*senpai* and *kohai*) of junior high and high school clubs, and to clarify the extent of differences in the senior-junior relationships based on factors such as the type of club activity, students' academic year, and gender. The research also aimed to examine the extent to which senior-junior relationships could be predicted on the basis of a description of the clubs' activities and characteristics of those activities. Junior high ($n=344$; 166 boys, 178 girls) and high school ($n=367$; 140 boys, 227 girls) students nationwide completed questionnaires. The results suggested that the first-year students reported that the senior-junior relationship was the most important one during both their junior high and high school years. The junior high students also showed a trend for the female students taking the senior-junior relationship more seriously than the male students did. These results suggest that the senior-junior relationships is more established in the activities of clubs that engage in a high level of competition, such as in sports competitions and contests, and also in sports clubs. It was possible to predict the policy and personality of the clubs' activities with a high degree of certainty, based on various aspects of the senior-junior relationships in those clubs.

Key Words : school club activities, senior-junior (*senpai-kohai*) relationships, junior high school students, senior high school students